

## 大陸・朝鮮半島の鉄をもとめて続く若狭・北近江の「和鉄の道」を訪ねる

分水嶺「水坂峠」を挟んで和鉄の道をにらむ北近江「高島 熊野本」と若狭「上中 熊川宿 &amp; 脇袋」

2008.9.1. By Mutsu Nakanishi

## 1. 北近江「高島 熊野本」

安曇川左岸 饗庭野丘陵 「鉄の加工工房があったという弥生の熊野本集落遺跡」

## 2. 若狭「上中 熊川宿 &amp; 脇袋」

5世紀 大和と結ぶこの地を治める王の墓群「脇袋古墳群」

若狭ではじめて築かれた前方後方墳・前方後円墳群

日本海に面する「若狭」は大陸・朝鮮半島と畿内・大和を結ぶ「古代 大和の和鉄の道」の北の玄関口

この道を通して 多くの渡来人そして「鉄」や文物が行き来した。

この琵琶湖北岸から若狭へ山越える「若狭街道」周辺には 数々の渡来人の痕跡や大陸・朝鮮半島の鉄の遺物が点在する。

また、大和王権はいち早くこの鉄の供給路・大陸との交流路を確保のため、この地の「王」と結ぶ。そんな証として、古墳時代初期のこの地の「王」たちの王墓である前方後方墳・前方後円墳が数多く築かれた。



日本で製鉄が始まる前夜 そんな大陸からの鉄の流入路の夢を頭に描いて「若狭街道」を訪ねました。



## ● 北近江 高島市 新旭町「熊野本遺跡」 BC1~1世紀

北近江安曇川の北岸に連なる饗庭野丘陵の南端 熊野本にある弥生の高地性集落 大量の鉄素材を大陸から持ち込んでいたといわれる。琵琶湖の北岸北近江から日本海沿岸・大陸への玄関口「若狭」へ向かう山越えの入り口に当たり、眼下に広がる高島平野と琵琶湖を一望できる。鉄の畿内流入の重要路で 早くから開かれた地であろう。

この地に弥生の大きな集落があり、入手した鉄を鉄器に加工していた。そして、この弥生の集落が消える時期を同じくして、この地の王たちの墳墓が築かれる。

## ● 北近江 高島市 新旭町「熊野本古墳群」(熊野本遺跡の隣接地) 3世紀

古墳時代安曇川の地を支配した王が、琵琶湖を見下ろす熊野本遺跡の跡地に築いた王墓群

初期前方後円墳・後方墳など大和との密接な関係・鉄製品や朝鮮系遺物の副葬など大和「鉄の道」北の玄関の守りの王の色彩が濃く、この地が重要拠点だった証拠だろう。

## ● 若狭 若狭町 上中町 脇袋「脇袋古墳群」 5世紀

若狭から北近江へ遡る北川右岸の丘陵地に初期前方後円墳など大和との密接な関係を示す古墳群が築かれ手いる大和「鉄の道」北の玄関 若狭の出入口であるこの地の王墓群

大陸と大和を結ぶ重要路を守る地域首長の色彩が濃く、大和がこの地 この道を重要視していた痕跡だろう。

ずっと頭にあった日本海沿岸から若狭そして琵琶湖へと 畿内・東国への鉄の流入路 古代大和王権の重要な「鉄の道」。北近江の琵琶湖へ西の比良山塊から流れ下る安曇川の北岸の饗庭野丘陵の南端の弥生の高地性集落「熊野本」遺跡で鉄素材や加工の痕跡のある鉄が出土しているという。そして、その後この地に地域の首長が興り、前方後方墳など大型の墳墓群を築いたという。電話やインターネットで調べても 詳細は良くわからない。

大陸・朝鮮半島への玄関口 若狭街道の要衝の地にあるこの熊野本遺跡・熊野本古墳群はどんなところだろうか・・・出土した鉄素材はどんなかたちなのだろうか・・・。

現地に電話して、照会するのですが、雑木林に覆われた丘陵地を別荘地として開発した場所で、遺跡は残っているが、草に覆われ、行っても何もなく、整理された資料も 現地にはないという。

情報は滋賀県埋蔵文化財センターの簡単な学習シートとみ。

場所は新旭駅のすぐ近く 西側の丘陵地の上。 弥生の高地性集落。この集落が消えた後、この地域を治める首長が小さな谷を隔てた隣接地に次々とこの地の首長が大和との密接なつながりを示す前方後円墳や大型墳墓を築いたという。

この琵琶湖北岸から西岸にかけては、その山中に鉄鉱石があり、数々の渡来人の痕跡とともに「鉄」関連遺物が数々出土している。日本で一番先に製鉄を始めた先進地のひとつ 牧野や古橋に古い製鉄遺跡群が残るこの北近江。

弥生時代にも きっと重要な鉄の痕跡があり、日本での製鉄の始まりにも大きな役割を演じたのではないかと・・・

「鉄」の流れを紐解く上で、欠くことのできぬ所だろう。

とにかく どんなところか 見に行こう。本当にどんな鉄素材が出土したのかも知りたいと。

今年の夏 若狭の縄文時代の貝塚「鳥浜貝塚」を訪ね、この地の縄文人が丸木船を駆使して、日本海沿岸の集落と広く交流していたことを知りました。また、この若狭の地は 古代大和の時代には 瀬戸内海と並ぶ日本海沿岸から若狭を玄関口。琵琶湖から大和へ結ぶ大陸・朝鮮半島との重要な交流路。まだ鉄素材を作れなかった日本への朝鮮半島の鉄の流入路。「鉄の道」である。瀬戸内海経由と並ぶ最重要路「大和の鉄の道」今も「若狭街道」の名で若狭と近江・京都を結ぶ重要路。

この街道を近江から山越して日本海側の若狭平野の出た処 若狭上中町脇袋に古墳時代初期の前方後円墳が築かれ、大和と密接な関係が残されていることも知りました。(脇袋古墳群)

古代大和に先立つ卑弥呼の時代 北九州諸国に独占されていた朝鮮半島・大陸の「鉄」の独占支配が崩れ、山陰諸国 鳥取の妻木晩田遺跡 青谷上寺地遺跡や丹後にも大量に蓄積され、畿内にも鉄が流入する。

鳥浜からの帰りに、「もう一度 北近江の鉄を調べたいなあ 北近江 牧野や古橋の古い製鉄遺跡群ばかりでなく、きっと この『近江・若狭を結ぶ若狭街道』にもそんな時代の『鉄』の痕跡があるだろう」と・・・。

以前、朝日新聞関西版に「鉄器登場」や「日本の原像」の記事に若狭街道に近い拠点で古墳時代の初期の大型墳墓群(熊野本古墳群)が紹介され、また確かその時に調べた、読売新聞の連載資料にも鉄と若狭街道地域に何か書かれていたと。

再度 朝日新聞関西版「鉄器登場」や「日本の原像」の記事を引っ張り出しました。

北近江 安曇川の北岸 饗庭野丘陵の南端「熊野本」にある弥生の高地性集落「熊野本遺跡」と古墳時代初期 前方後方墳など大型墳墓群のスタートを示す熊野本古墳群。大量の鉄素材が出土し、この地で鉄器加工をやっていた可能性があるという紹介されている。

熊野本遺跡はどんなところだろうか・・・ また、大型の前方後円墳を築いた熊野本古墳群にも興味深深。

「熊野本遺跡とともに若狭街道をたどって若狭へ 初期の前方後円墳・前方後方墳を築いた若狭の王墓群も訪ねよう」と地図を出したり、熊野本遺跡のある高島市に電話で照会したり。

熊野本遺跡については 以前調べた滋賀県埋蔵文化財センターの学習シートがあるだけで、良く判らない。

場所は 新旭駅の西側の丘陵地の上。 事前に電話でいろいろ聞いたのですが、昔 雑木林に覆われた丘陵地を別荘地として開発した場所ではあるが、いっても何もないという。

【参考】1. 滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡群」

[http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10\\_cultural\\_assets/gakushu2/data/2250/index.html](http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10_cultural_assets/gakushu2/data/2250/index.html)

2. 朝日新聞 2001.10.10. 日本の原像 古墳時代の始まりを解く鍵 前方後方墳の謎 熊野本古墳群

東海・近江に多い初期の前方後方墳が示す大和王権の対抗軸から中枢へ

1. 北近江 琵琶湖北岸の饗庭野丘陵地 「高島市 熊野本」  
 安曇川左岸 饗庭野丘陵 「鉄の加工工房があったという弥生の熊野本集落遺跡」



実りの秋を迎えた琵琶湖北の湖岸 安曇川の北側に広がる新旭町熊野本周辺から饗庭野丘陵地 2008.9.1.  
 丘陵地中央下段（○印）の丘が熊野本遺跡群



JR 湖西線 新旭駅から見た西に広がる饗庭野丘陵 中央部が熊野本遺跡の位置



大量の鉄を出土し、「弥生の鉄器加工工房?」といわれる弥生の高地性集落「熊野本遺跡」の位置  
 谷を挟んで北側にこの地の首長たちの墳墓群「熊野本古墳群がある」

9.1. 快晴の早朝 神戸7時20分発湖西線の新快速「敦賀」に乗る。青春18切符である。

今回は新旭駅で降りて、弥生時代の高地性集落「熊野本遺跡」を訪ねた後、再度湖西線で近江今津に出て、そこから若狭小浜行のJRバスで水坂峠越の若狭街道を上中町へ出て、5世紀いち早くこの大陸への玄関口の要衝の地で大和と結び、前方後円墳や前方後方墳の墳墓を築いた首長一族の王墓群を見に「若狭上中町脇袋古墳群」を訪ねる。

午前中に、熊野本遺跡の見学が終われば、午後若狭街道の古い家並みが残る「熊川宿」を訪ね「若狭上中町脇袋古墳群」へ。青春18切符を持っているので、時間があれば帰りは敦賀まわり。ざっとこんな計画でスタート。

「鉄の道」を意識して「若狭街道」を訪ねるのは初めてであるが、何度か車やバスで通った街道筋。若狭と言っても新快速が走る関西電車圏の延長みたいなもの。全く電車・バスの時刻表も調べず、出たところ勝負である。

京都からトンネルを抜けて琵琶湖岸に沿って比叡・比良の山裾を北へ。残念ながら蓬萊・打見の比良の山は雲の中。

蓬萊山には今はロープウェイがかかっている。学生時代よく登った比良の谷筋を眺めながら、正面谷を渡ると湖岸に砂浜が広がる近江舞子。比良の山裾を抜けて湖北に入ると山々が西に少し後退し、湖岸まで一面に黄金色の田圃が広がる高島平野。秋の実りをつけ美しい。

京都・滋賀・福井の県境の山々が周囲を取り囲こみ、北西に見える山々の三県境界の辺りから東へ安曇川が高島平野の中央を流れ下り、琵琶湖へ注ぐ。京都から比良の山々の裏側をまっすぐ北へ上ってきた若狭・京街道（朽木街道）が高島平野への出口朽木でこの安曇川と出会い、若狭・京街道はそのまま山中を北へ水越峠へと山間をのぼって行く。

また、高島平野の北側のもうひとつの中心地近江今津から、石田川沿いを西に登ってきた若狭街道と水越峠の下で合流して、若狭へ下りて行く。



安曇川 新旭駅手前鉄橋より



安曇川を渡ると湖西線新旭駅 饗庭野丘陵が背後に

湖西線の車窓より 新旭周辺 2008. 9. 1.



神戸から約1時間半 琵琶湖へ注ぐ安曇川の鉄橋を北へ渡るとすぐJR新旭駅。駅の西側 田園地帯の向こうに南北に細長く続く饗庭野丘陵が見え、電車はスピードを落としながら新旭駅へ。

地図では 新旭駅で降りてまっすぐ西へ 約1kmちょっと。 饗庭野丘陵地の山裾にぶち当たったところあたりが、熊野本遺跡である。丘陵地も見えているので、うろうろすることはない。

JR新旭駅のある安曇川の北岸一体はもともと新旭町なのですが、平成の大合併で高島郡5町1村（新旭町を中央に南の高島町、安曇川町、北の今津町、マキノ町、西の朽木村）が合併して誕生し、新旭に市役所が置かれている。

10人ほどが下車して午前9時 新旭駅の改札を出る。 駅員に熊野本遺跡について尋ねるが、駅を出て、すぐから熊野本の地であるが、熊野本遺跡は知らないし、あるのは風車村のハンプのみ。案内図もないという。

駅横に観光案内所があるのでそこへ行けという。案内所も似たようなものですが、熊野本遺跡の位置が印された新旭の観光案内図をもらった。

熊野本遺跡のある饗庭野丘陵の南端部は鎌倉から戦国時代にこの地周辺を治めた領主高島氏の居城・屋敷跡が残っていて、この山城を巡る遊歩道が丘陵地の上に整備され、山裾の森林スポーツ公園



湖西線 新旭駅周辺 2009. 9. 1.

園ほか 新旭の観光名所が記され、そのマップの端に熊野本遺跡の位置が印されている。この案内図以外は何もないという。丘陵地の山間を開発した別荘地の一角に入り込めぬ草ぼうぼうの雑木林が広がっている。その中の一角が遺跡だという。どうも様子が違うなあ・・・。

まあ 製鉄関連遺跡といえばそんなもの。行けば 案内板が残っているかもしれない・・・納得である。「行くの?」と笑われながら、熊野本の丘陵地周辺の市街地図もコピーしてもらって出発する。



この丘陵地に沿ってよく整備された道を北へ 写真右端の建物のところを西へ回りこむと熊野本遺跡の丘陵地



駅からまっすぐ丘陵地の山裾へ



森林スポーツ公園



山裾の道路と平行して灌漑用水路

駅前の商店街を抜けると正面の饗庭野丘陵地まで、まっ黄色の田園が広がる 2008. 9. 1.



駅をでて、まっすぐ西へ丘陵地へむかう。駅前の商店街を抜けると田園地帯。稲穂がたれる中をきょろきょろ楽しみながら 15 分ほどで森林スポーツ公園のコースの横 丘陵地に沿う道に出る。そのまま まっすぐ丘陵地へ上って行くと清水山城 北へ道を取ると善林寺・大泉寺の案内標識が角にある。残念ながら、熊野本遺跡は案内されていないが、マップと照合しながら北へ丘陵沿いの道に行く。車の通る大きな道であるが、並木が植えられた歩道が整備され、灌漑用水が傍を流れる気持ちのいい散策路で古いお寺や神社が点在する歴史の道で、丘陵沿いのこの道の上が熊野本遺跡であるが

道がなく、少し進んで丘陵地の先端を西へ回りこんで谷間から丘陵地の上へ出るように道がある。

途中 善林寺・佐々木神社の標識があり、このお寺を丘陵地へ登れるかもしれないとの森の中へ。誰もいない林の中にいかにも古そうな大きな木が両側に立ち並び参道の奥に小さなお堂があった。案内板によると 10 世紀平安時代の千手観音菩薩が祭られているという。



丘陵地の山裾 静かな林に包まれた善林寺の境内 2008. 9. 1.

境内からは奥の丘陵地へ上る道がなく、元の道にもどり少し行くと、丘陵地の谷間に入って上ってゆく道との十字路。角に案内標識があり、熊野本古墳群 0.3KM の名がある。やっと見た熊野本遺跡への案内標識。



標識に従って、丘陵地の縁を回り込んで西へ上ってゆく 丘陵地の上へ登ってゆく十字路 2008. 9. 1.

入り口で程なく左へ丘陵地の上へ登る枝道の入り口脇に「熊野本弥生高地性集落」反対側に雑草に埋もれて「熊野本古墳群」の概要を書いた案内板がありました。ここが丘陵地の丘の上を開発して別荘地として売り出された場所。入り口の道端のばあさんの話ではほとんどが時折やってくる人たちで、常住している人は極わずかとか。



熊野本遺跡・熊野本古墳群のある別荘地へ登ってゆく入り口 2008. 9. 1.

まったく人の気はいが感じられない道を少し登ると道脇の草むらの中に、熊野本古墳群の概要を記した大きな案内板がある。

人のいない別荘地の森の中で、集落跡や古墳群を探せるか ちょっと心配になっていたところなので、やれやれである。



熊野本遺跡・熊野本古墳群の概要を示した案内板

地図の上が南でちょっとややこしいが、登ってゆく左手丘の別荘地の中が鉄素材を出土した弥生の高地性集落「熊野本遺跡」右手の丘が古墳時代の幕開け頃築かれた古墳群「熊野本古墳群」である。

地図の上に遺構や古墳の位置 また古墳の形が記されているので心強い。しっかり頭に入れなければ・・・。  
丘に登ってわかったのであるが、茶色く色づけられた左手は別荘地として開発され、実際に家並みがある場所で、右手の緑の古墳群のある場所は開発のため、道路・区画が整備されたが、途中で開発が断念され、現在は雑木と雑草に埋まっている。この場所全体が、どうも民有地で整備ができないようだ。

弥生の高地性集落 熊野本遺跡では鉄素材や鉄器などの遺物とともに約 40 棟の竪穴住居とともに大型掘立柱建物遺構水銀朱や多数のガラス小玉・鉄族などの遺物が出土した墳丘墓遺構がみついているが、その位置が印されている。また、古墳時代初期の古墳群 熊野本古墳群では 38 基の古墳がみつきり、その主なものが形・大きさを考慮してマークされている。一番の興味は 3 世紀半ば 卑弥呼の時代に築かれた前方後方墳(6号墳)と前方後円墳(12号墳)である。

案内板を眺めて、しっかりと位置関係を地図に写す。

【資料-1】 弥生の高地性集落熊野本遺跡概要 滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡」より整理

【資料-2】 熊野本遺跡・熊野本古墳群からの出土品とその意義  
滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡」・「熊野本古墳群」などより整理

【資料-3】 弥生時代 中期末 「原始鍛冶の始まり」

## 1.1. 大和に前方後円墳が作られ始めた時代に築かれた「熊野本古墳群」

案内場から少し登ってゆくと 右側の整備地 古墳群のある場所への道が出てくるが、立入り禁止の綱が張られている。

道が見つからねば、ここから再度登り直すことにして、先へ進むと別荘の家並みのある Y 字路。左手の道は左側の丘を別荘地に整備され家が建ち並ぶ居住地を巡る道で この丘一体が熊野本遺跡が出土したところ。右手の道はそのまま浅い谷筋をつめる道で、右側にうっそうとした雑木林が広がる丘で この中が古墳群の丘陵地である。



弥生の向地性集落 熊野遺跡がある南の丘(左)と古墳群のある北の丘(右)との別れ周辺 正面に見えるのが南側の丘

そのまま、二つの丘の間の道を登りつめ、右の丘の頂上の方へ回り込むと右手のブッシュの中に「熊野本 6 号墳」と書かれた立て札が倒れかけで立ち、その傍をブッシュの奥に消えかかった細い道がある。 おそらくこの古墳を巡る道だろう。



熊野本古墳群が広がる北の丘へ登りつめたところに熊野本 6 号墳がありました 2008. 9. 1.

6 号墳は卑弥呼の時代に作られた前方後方墳で、是非見たかった古墳で、 立て札にはその概要が次のように書かれている。

### 「 熊野本 6 号墳

6 号墳は全長約 28m の前方後方墳で 標高 165m の丘陵上に立地。  
この古墳からの見晴らしは大変良く 平野部や琵琶湖までを一望  
することができる。墳丘は南斜面の幅を広く築造していることから  
生産基地である平野部を意識して築造されたと思われる。  
この被葬者の権力を壮大に見せる工夫と考える。  
前方部からは破碎された土器と焼土が出土。古墳時代前期の湖西地  
域の首長の墓と考えられる 」



熊野本 6 号墳の概要を示す立看板

立て札の前の踏み跡を頼りブッシュの中をかき分けながら登ると雑木林の中の幅の細い尾根筋のこぶの上。  
ここがどうも一番高い所で、高低さで見ると前方後方墳の前方部ようですが、良くわからない。目を凝らすと細い尾根筋  
が北の方に伸び、東側から明るい日が差し込んでいる。北にも下りながらたどれそう。でこぼこがあちこち林の中に見える



が、古墳なのかどうかは判然としない。この古墳も前方後方墳の形は良くわからない。

尾根筋を北へ少し幅の広がったおそらく後方部と思われるあたりに降りてゆく。 林の中ではあるが、東側がオープンになり、木々の間から遠く高島平野から琵琶湖が見える。この古墳が作られた時には高島平野から琵琶湖の大パノラマが一望でき、下からもこの古墳がよく見えたのだろう。この地が日本海側へ抜ける若狭街道・琵琶湖の交通の要衝であったことが頷ける。この地域を支配した首長たちが、権力の象徴として 若狭街道を行く人たちに自分の権勢を見せ付けた王墓だったのだろう。



卑弥呼の時代に築造された前方後方墳    この地域の首長墓    熊野本6号墳

前方後方墳は 卑弥呼の時代 大和に前方後円墳 出雲に四隅突出墳がそれぞれの地域の首長の墓として築かれてゆく古墳時代の前期

この近江から東海地域作られ始め、日本各地で大和が勢力を伸ばしてゆく過程で、その支配地の首長の墓として築かれるようになり、次に前方後円墳に置き換わってゆく。

大和の王権に遅れて加わった地域首長が築造を許された形だとか 大和王権の中心勢力 物部氏が地その支配勢力地を広げる過程で築いたとの説もあり、その詳細は良くわかっていない。ただ、大和王権の勢力が巨大化してゆく過程で、大和王

権を構成してゆく地域首長などの墓であることは間違いない。もし、この6号墳が古墳時代の初期 3世紀前半に築かれたとするとこの重要地点をにらむ地域首長が早くから存在していたことになる。

この熊野本が大陸と大和を結ぶ「鉄の道」の重要ポイントであることを示す重要な遺跡である。

(前方後円墳の出現は3世紀末から4世紀初頭 東海からとする説も有力であり、この6号墳の年代についてはどうも 確定されていないようだ。)

このまま尾根筋を下れば、この地が開発された時に作られた道に出られそうですが、道のないちょっと荒れ果てた状況の中では先へよう行けず、古墳分布図があった入り口まで引き返し、立ち入り禁止の綱が張られたところからこの北の丘一帯に入りなおした。

道はアスファルト舗装された道がまっすぐ奥へ伸びているのですが、アスファルト破れ、道の真ん中にも雑草が覆い始めている。

道の両側の林も全く手入れされた形跡もなく、あれるに任せたままで、うっそうとしたブッシュと雑木の森が覆っている。

自然の森よりももっと厳しくて、この森の中へ入り込む勇気がわからない。

この森の中の尾根筋に分布している古墳をそがそうと道路脇から林の中に入り込む道探すのですが、良くわからず。

30分ほど、道路から森の中を覗き込んだり、少し入ってみたりと舗装道路をぐるっと一周しました。

造成地が破棄されてしまうと、その中を通り抜ける道もなく凄いことになることを実感しました。



道路が整備された北の丘 今は道も雑草に



熊野古墳群が分布する北の丘 前方後円墳があるあたり 2008. 9. 1.

踏跡を見つけて、ブッシュの中に入り、踏み跡を頼りにこんもり盛り上がった場所を探す。いくつもそんな場所があるのですが、古墳であるかどうか確かでない。この辺りに 大きな円墳 前方後円墳がある辺りなのですが、結局良くわからずに出てきました。

元の道を引き返して、入り口に下ってゆくところこの森の向こうに琵琶湖と高島平野がひろがっていました。



## 1.2. 鉄素材を出土し、鉄器の生産工房があった可能性?? 弥生の高地性集落「熊野本遺跡」

再度登りなおして、Y字のところから、左へ 別荘が建ち並ぶ南の丘に入ってゆく。

今は別荘が建ち並ぶこの南側の丘一帯が、弥生の高地性集落「熊野本遺跡」である。

Y字のところから南へ南の丘の東端に沿って 100m ほど入るとちょうどこの丘の南の端で、この南の丘の南東側の縁は崖になっていて、その中に今は住宅が建ち並ぶ別荘地が造成されていた。

この南の丘の南東の隅一角が家が建てられず、草地に整備され、今は草ぼうぼうのところが、その端「熊野本遺跡」の案内板が立ち、方形の墳丘があった場所である。



弥生の高地性集落 熊野本遺跡 2008. 9. 1.

この雑草地の手前側に方形墳墓 奥に大型建物など竪穴住宅がひろがっていた

案内の立て札には次のように記されている。

### 熊野本遺跡

熊野本遺跡は弥生の高地性集落と呼ばれる弥生の中期から後期の遺跡。

宅造道路のついでに東西 300m 南北 200m の範囲に広がる大規模な集落で、滋賀県で最大規模の高地性集落といえる。発掘調査で多数の竪穴住居や墳丘墓が見つかり、また多数の弥生土器・石器・鉄器も出土している。

遺構や出土物はほかの地域 特に日本海地域とのつながりが強くうかがえることから、交通の拠点に営まれた集落と考える。

また、滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡」には さらに次のように書かれている。

熊野本遺跡は、弥生時代中期（約 2100 年前）～後期（約 1900 年前）の高地性集落。

これまでに直径 12m の大型の竪穴建物を含む竪穴建物が約 40 棟見つっています。

また、鉄製品や鉄素材が多数出土していることから、鉄製品を加工・製作していた可能性が指摘されている。

遺跡の南西からは、東西 12m・南北 15m の弥生時代後期末の墳丘墓が見つかり、木棺跡からは水銀朱とガラス小玉 741 点が出土。

多量に見つかった鉄製品や鉄素材は、実態の良くわかっていない弥生時代の鉄生産の様子を知る手がかり。

日本海沿岸地域と近畿・東海を結ぶ位置にあり、遺跡の時代は、日本列島内に鉄器文化が急速に普及する時期と重なることから、熊野本遺跡は、交通路や鉄の掌握を通じて大きな勢力を持った湖西地域の拠点集落であったと考えられる。

集落の廃絶後に、集落跡に墳丘墓が築造され、さらにこれに継いで古墳時代前期～中期にかけて首長墓群（熊野本古墳群）が営まれる。この中には発生前の前方後方墳である熊野本 6 号墳も含まれており、引き続き、この丘陵を含む地域が重視されていたことがわかる。



### 弥生の高地性集落 熊野本遺跡

熊野本遺跡は、弥生時代中期（約 2100 年前）～後期（約 1900 年前）の高地性集落（こうちせいしゅうらく）です。これまでに直径 12m の大型の竪穴建物を含む竪穴建物が約 40 棟見つっています。

また、鉄製品や鉄素材（てつそざい）が多数出土していることから、鉄製品を加工・製作していた可能性が指摘されています。

遺跡の南西からは、東西 12m・南北 15m の弥生時代後期末の墳丘墓が見つかり、木棺跡（もっかんあと）からは水銀朱とガラス小玉 741 点が出土しました。墳丘裾からは人頭大の貼石と朱を造る際に使う L 字状石杵が出土しています。

熊野本遺跡が広がる台地状の丘陵部と、谷で隔たれた北側には、円墳 22 基・方墳（ほうふん）12 基・前方後円墳 1 基・前方後方墳 1 基で構成される、湖西地域で最も規模の大きな古墳群である熊野本古墳群が所在しています。

熊野本遺跡から多量に見つかった鉄製品や鉄素材は、実態の良くわかっていない弥生時代の鉄生産の様子を知る手がかりとして、注目されています。熊野本遺跡は、日本海沿岸地域と近畿・東海を結ぶ位置にあり、遺跡の時代は、日本列島内に鉄器文化が急速に普及する時期と重なることから、熊野本遺跡は、交通路や鉄の掌握を通じて大きな勢力を持った、湖西地域の拠点集落であったと考えられます。

集落の廃絶後に、集落跡に墳丘墓が築造され、さらにこれに継いで古墳時代前期～中期にかけて首長墓群（熊野本古墳群）が営まれます。この中には発生前の前方後方墳である熊野本 6 号墳も含まれており、引き続き、この丘陵を含む地域が、重視されていたことがわかります。



熊野本遺跡 台状墓全景（現在 2006.9.1）



台状墓から出土したガラス玉



朱を造る時に使う L 字状石杵



台状墓全景



大型の竪穴建物

滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡群」より

[http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10\\_cultural\\_assets/gakushu2/data/2250/index.html](http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10_cultural_assets/gakushu2/data/2250/index.html)

なお、出土品は現在公開されておらず、高島市新旭町の旧新旭町の教育委員会分室に保管されているという。

この東南の端は崖になっていて、そこからは 眼下に広がる新旭の家並み・高島平野琵琶湖が見渡すことができた。やはり、集落があった時代 この南の丘からも広く高島平野を見渡すことができたのだろう。



遺跡東南の端は崖になっていて、そこからは 眼下に広がる新旭の家並み・高島平野琵琶湖が見渡せる  
出土した「鉄」は 板状鉄素材や鉄族など 30 点以上。

鉄素材は長さ 29cm 幅約 3cm 厚さ約 3mm のもの 9 点で、加工した跡のあるものもあり、この地で大陸から来た鉄素材を使っ  
ての鉄器の加工・製作が行われていた可能性があると教えてもらったが、鉄素材・鉄族の実物を見ていないので、  
実用品がつくられていたがどうか・・・は何ともいえず。

でも、大陸から日本海沿岸を通して若狭の港に揚げられた鉄が すぐ近くのこの場所で鉄器に加工。

この鉄器の流れが、大和への鉄の道の始まりと考えると楽しくなる。

大和が興る前のほんとうに早い時代から 大陸・朝鮮半島から日本海沿岸・若狭を通して日本の中央 畿内へ入る鉄の  
道があり、それが北九州と対抗できる大和連合勢力を作りあげたのかもしれない。

若狭・北近江というとすぐに古代 渡来人・継体天皇の系譜が持ち出されるが、そのもっと前からこの地は中央を支え  
る重要な拠点だったのだろう。

### 1.3 熊野本遺跡群が示す原始鍛冶のはじまり

#### 朝鮮半島から日本海沿岸と太平洋側を結ぶ鉄の道 『若狭街道』で



琵琶湖西岸から若狭へ抜ける北近江には古墳時代から古代に掛けて、大陸・朝鮮半島との交流路の北の玄関口  
朝鮮半島との交流・渡来人の痕跡が点々と残る地。

この時代の最大の交易品は「鉄」素材  
大和王権支配・勢力伸長の印として各地に次々と築かれる前方後円墳。

この地にも弥生時代大陸からもたらされた鉄素材の加工を行っていたと考えられる集落を引き継ぐ形で、  
大和王権成立と時を同じくして、前方後方墳・前方後円墳が築かれ、この「鉄の道」の要衝を守る。

#### ○ 弥生の高地性集落 熊野本遺跡

直径 12m の大型の竪穴建物を含む竪穴建物が約 40 種が出土。

また、板状鉄素材や鉄族など 30 点以上の鉄器が出土。鉄素材は長さ 29cm 幅約 3cm 厚さ約 3mm のもの 9 点で、加工した跡  
のあるものもあるといい、この地で大陸から来た鉄素材を使っ  
ての鉄器の加工・製作が行われていたというが、鉄素材・  
鉄族の実物を見ていないので、実用品がつくられていたがどうか・・・は何ともいえず。

(気になるのはこの鉄素材が薄い板状であることから実用にすぐわめ軟鉄の可能性 また、大型の竪穴式住居は鍛冶工場の  
可能性があるのだろうか?) また、墳丘墓の本棺跡からガラス小玉 7 点、他に多量の鉄鏝などが出土している。

#### ○ 熊野本古墳群

旧新旭町熊野本墳林の丘陵上に 38 基(前方後円墳 1、前方後方墳 1、方墳 12、円墳 24)の古墳が分布。

なかでも、古墳発生期の土器がそれぞれで出土した

三世紀前半の前方後方墳(全長約 2.8メートル) 6号墳。

三世紀半ばの前方後円墳(同約 3.0メートル) 12号墳

の発見は最古級の前方後方墳と前方後円墳が同じ古墳群で造り分けられていることを示しており、

大和との関係や、近江が前方後方墳の発祥地とする見方など前方後方墳のルーツを解く鍵だといわれる。

この古墳群は、近くにある熊野本遺跡(弥生時代)の墳丘墓から継続的に首長の墓として営まれていたとみられ、

卑弥呼の死(248年ごろ)の後から造られたとの考え方が一般的だ。

熊野本遺跡からは大陸との交易を思わせる大量の鉄器が出土していることもあり、

「卑弥呼が邪馬台国の女王として君臨していたころに、日本海ルートの交易を握った有力者一族が築造したのでは!」  
と見られている。

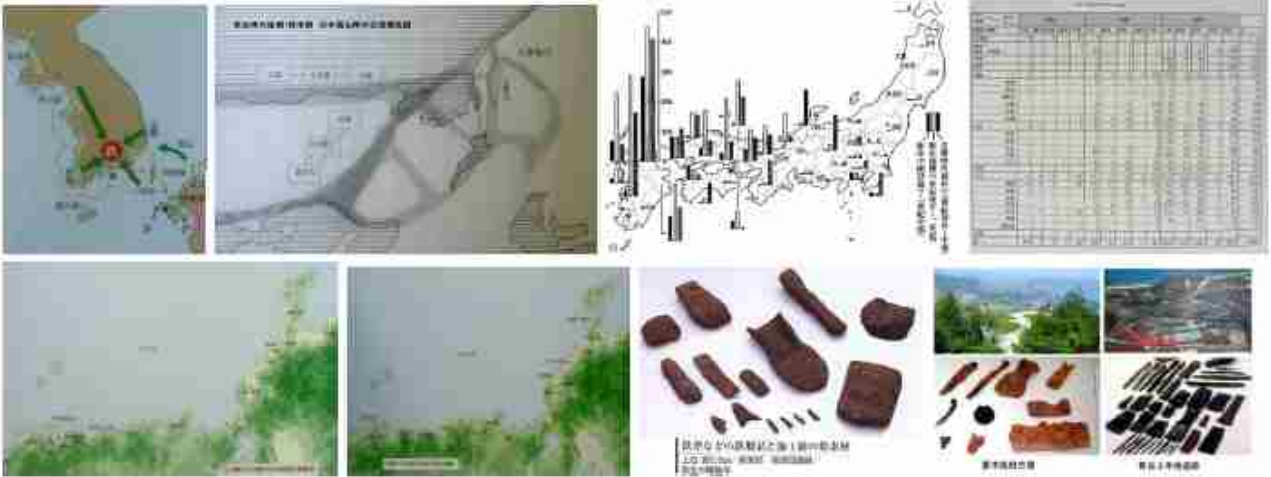
# 弥生時代中期末 原始鍛冶の始まり

北近江 熊野本遺跡の鉄は 山陰の拠点集落に集積された朝鮮半島・大陸の鉄か・・・

鉄製品加工技術は弥生時代の当初 大陸から輸入した鑄造鉄片の破片を原料として、砥石研摩などで小型の工具に再生加工することが主であったが、中期末頃になると板状薄鉄素材の整切や火作り曲げ・砥石研摩仕上げ加工を主とする原始鍛冶が始まり、山陰から北陸にかけて玉作り工場の工具生産の鍛冶工場などが生まれてくる。山陰の平田遺跡 丹後奈良岡遺跡 そして北陸福島遺跡や奥原神遺跡などである。

北九州の諸國に独り占めされていた大陸の鉄は 弥生時代中期末頃になると工具から農耕具・武器など需要が旧拡大する一方、北九州の独占が次第に崩れ、瀬戸内諸國や日本海沿岸の山陰（妻木晩田や青谷上寺地など）や丹後・北陸にも大量に集積されるようになり、畿内にも次第に持ち込まれるようになる。朝鮮半島・大陸から北九州を経て、日本海沿岸の「鉄」の交易路は畿内大和へいたる主要な鉄の道となって広がってゆく。

（この時代 日本ばかりでなく、日本への鉄の主要供給先であった朝鮮半島も「漢」の統制支配が崩れ、戦乱の時代に突入し、供給先も不安定になる。また、日本でも 西日本各地で次第に北九州ばかりでなく、大和 山陰 丹後 北陸などで國が興り、連合を繰り返しつつ地方勢力として、台頭し、北九州と共存・対抗しつつ勢力を拡大。 特この鉄の供給ルートも北九州独占から次第に各地の諸國が入手できるようになり、古墳時代に入ると 次第に鉄の供給ルート支配を手に入れた「大和」（畿内大和を中心とし、北九州・出雲・吉備・東海などの連合体）が台頭してゆく。



当時の鍛冶工場の様子を古代製鉄技術解明の權威大澤正巳氏の資料より引用すると 大型の堅穴住居の中に鍛冶跡とみられる焼土面そして型と砥石と工作用大石をそなえ、棒状切片や板状切片らとともに 鉄製品・半製品が放置。羽口や鉄滓の出土はなく、原始鍛冶の様相時としている。

（ 大澤正巳 歴博シンポ「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」金属学的分析からみた倭と伽耶の鉄 より ）



若狭・北近江は日本海沿岸の交易路の真っ只中にあり、熊野本遺跡で出土した鉄も日本海沿岸から畿内に持ち込まれた「鉄」であろう。そして、その後 鉄の支配力を強め台頭してゆく大和の北の支閥の重要拠点として、引き継がれてゆく。熊野本遺跡では 約 40 軒ほどの堅穴住居とともに大型堅穴住居が見つかり、鉄器への加工が行われていた可能性を秘める板状の鉄素材鉄などの出土品が見つかり、また、集落の端からは台状の墓とそこから、大量のガラス玉が出土している。このことから、この弥生の高地性集落の生産工場的な可能性があるとされるが、この大型堅穴住居が当時の丹後・北陸でみられる鍛冶工

房の可能性や具体的な板状の鉄素材の中身など具体的な熊野本遺跡の性格については資料を持ち合わせておらず、良く判らない。しかし、この地はこの時代急速に鉄の蓄積度を上げてゆく日本海沿岸の鉄の交流路の中にあり、次の時代鉄の流通を支配し統一王権を建立する大和の「鉄の道」北の玄関に位置し、この地が大和の重要拠点として代々の支配首長の古墳が築かれてゆく。すなわち、この熊野本遺跡は大陸・朝鮮半島との交流の玄関を意識するさきがけといえるのかもしれない。

また、日本海を吹く季節風と海流を考えると、日本海沿岸は北九州を経ずに 直接大陸・朝鮮半島と交流したとも考えられ、その拠点としての位置づけも考えておかねばならない。



台状墓から出土したガラス玉 台状墓全景 大型の竪穴建物  
多数の板状鉄素材や鉄を出土した熊野本遺跡 台状墓と大型建物



参考

1. 滋賀県文化財学習シート「熊野本遺跡群」より  
[http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10\\_cultural\\_assets/gakushu2/data/2250/index.html](http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10_cultural_assets/gakushu2/data/2250/index.html)
2. 歴史シンボ「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」-大澤正巳 金属学的分析からみた倭と伽耶の鉄-
3. 北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影
4. 村上恭通著「古代国家成立過程と鉄器生産」
5. 村上恭通著「倭人と鉄の考古学」

1.4. 参考 古墳時代の始まりを解く鍵 前方後方墳 朝日新聞の記事より

朝日新聞 2001.10.10、古墳時代の始まりを解く鍵 前方後方墳の謎 熊野本古墳群  
東海・近江に多い初期の前方後方墳が示す大和王権の対抗軸から中核へ

## 日本の原像

第12部 権力の奥津城 ④

### 前方後方墳「狗奴国を象徴」

古墳時代の歴史を歩く

熊野本古墳群は、古墳時代中期から後期の間に築かれた前方後方墳の集積地である。この遺跡群は、大和王権の対抗軸から中核へと発展する過程を示している。特に、この地域には多くの板状鉄素材や鉄器が出土しており、これは当時の鉄の流通と蓄積を示している。

前方後方墳の謎

前方後方墳は、古墳時代の代表的な墳墓形式である。その形状は前方と後方が異なる長方形の墳墓で、これは当時の社会階級や権力の象徴とされている。熊野本古墳群の前方後方墳は、その中でも特に規模が大きく、構造も複雑である。

朝日新聞 2001.10.10

## 2. 若狭「上中 熊川宿 & 脇袋」

### 5世紀 大和と結ぶこの地を治める王の墓群「脇袋古墳群」

若狭ではじめて築かれた前方後方墳・前方後円墳群

#### 2.1. 近江今津駅からJRバスで 若狭街道 水坂峠を越えて 若狭熊川宿・上中町へ 日本海沿岸 若狭側の入口にある古代大和と結ぶ首長級の古墳群 脇袋古墳群を訪ねる



新旭駅から約5分で近江今津。古くから西近江 琵琶湖交通の要で、この港と若狭街道を經由して 日本海と近江・大和・  
が結ばれる。湖西線近江今津駅から新快速電車に接続して1時間に1本の若狭街道を通過して若狭小浜線の上中駅から小浜駅  
へ約1時間で結ぶ路線バスがある。今は湖西線を新快速電車  
が敦賀まで走っているの、敦賀から小浜線で若狭へ行  
けるが、若狭へはこの路線バスを利用する方が、はるかに  
早く便利である。

若狭街道は近江今津からまっすぐ若狭と近江の分水嶺  
水坂峠へ石田川を遡り、峠を越えて若狭側の北川水系を真  
っ直ぐ、上中町・小浜へ下ってゆく。

航空写真で見るとこの若狭街道の道筋は中央構造線が走  
る四国吉野川水系や紀伊紀ノ川水系と同じく直線的に切れ  
落ちた断層地溝帯の中なのだろう、海岸まで直線的な地溝。  
距離的にもストレートの短い最短距離である。

縄文・弥生の時代から日本海側から近江・琵琶湖へ抜け  
るこの地溝帯の道を知っていて、多くの人たちがこの道を  
往来した。弥生・古墳時代の昔から、大陸・朝鮮半島の「鉄」もこの道を通して近江へもたらされたに違いない。  
若狭街道は「鉄の道」である。



当時日本では鉄素材を作ることは出来ず、朝鮮半島にその供給を求めた。当初 北九州の諸国に独り占めされていた  
「鉄」が、弥生の中期・後期には日本海側の山陰・北陸で急増し、そして 大和にも数多くの鉄器が持ち込まれ、こ  
の鉄器の力を背景に大和王権が支配を強めてゆく。この鉄の供給ルートが北九州諸国の手から離れ、日本海ルート・  
瀬戸内ルートが確立されてゆくとともに大和王権が形作られてゆく。

この若狭街道は日本海側から大和への鉄の道の北の玄関口である。

水坂峠を挟んで、近江側には弥生時代 鉄器とともに多数の鉄素材が出土した熊野本遺跡があり、そして、その後、古墳時  
代になると同じ地に大和と結ぶ地域の有力皇族が前方後方墳・前方後円墳をつくり、この地を固める。(熊野本古墳群)  
この若狭街道を通過して「鉄」が流入してきたそんな歴史の1コマである。



一方、この若狭街道の若狭側の若狭町上中にもこの重要路を見守る歴史痕跡が残されている。古代大陸と大和を結ぶ重要路の北の玄関口若狭から近江へ山を越える入口に当たる神中町。近江と若狭を隔てる水坂峠から日本海まで 若狭平野の中央をまっすぐ北川が流れくだり、この川にそって、若狭街道が続く。この北川流域にも古くから 大和と結びこの重要路を守る若狭の首長が現れ、その象徴である前方後方墳・前方後円墳を築きこの地を固める。(5世紀 上中町脇袋古墳群)

近江から北川沿いに下ってくる若狭街道が山並みを抜け海岸沿いの平地に出たところに位置する上中町の山裾にはその後も古墳が多数築かれる。背景に大陸から持ち込まれてくる「鉄」があったに違いない。

中でも、5世紀 上中町北川の北岸の山裾「脇袋」に築かれた脇袋古墳群はこの地に築かれた前方後方墳・前方後円墳の最も古いものである。



若狭地方の主要古墳位置図  
近江からの出口上中町に古墳が集中



若狭で一番古い前方後方・前方後円墳が築かれた  
上中町脇袋

若狭街道の若狭側と近江側の出入口に大和と結ぶそれぞれの地域首長がどっしりと勢力を伸ばし、この交易路を行き来する文物を管理する。大和がこの「鉄の道」を非常に重要視していた証だろう。そして この道は古代ばかりでなく、現在に至るまで、その後も日本海側と近江や畿内・大和そして京都を結ぶ重要路でありつづける。また、近世の若狭街道・京街道のなごりとして、峠下に熊川宿の家並みが歴史的家並保存地区として残っている。



若狭街道沿いを流れ下る北川



水坂峠を越えて若狭に入って熊川宿

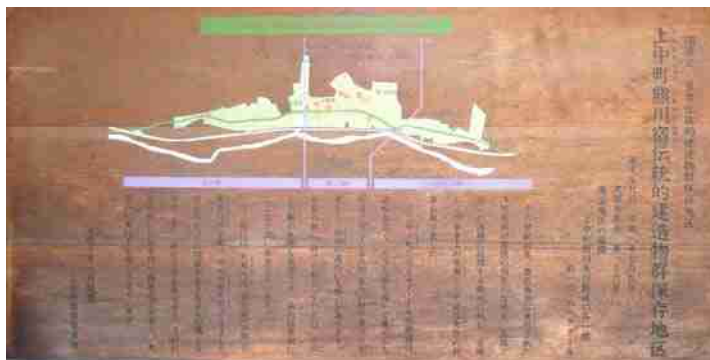
琵琶湖岸の近江今津駅からバスに揺られて 若狭と近江の分水嶺 水坂峠を越えて約40分ほどで熊川宿。



この地の王墓 脇袋古墳群が山裾に見える脇袋の里  
若狭街道の若狭側の入口 若狭上中町

蛇足ながら 近江と若狭の分水嶺は「水坂峠」であるが、県境は少し西へ下った「熊川」の入口にある。分水界が県境になっているのに、水坂峠周辺のみだけが、峠を越えて若狭側に食い込んでいる。これも 近江・畿内側の勢力が強く 水坂峠周辺を近江側に位置づけ手おきたかったのかもしれない。街道筋が重要な地であった証拠でもあろう。

2.1. 歴史的家並保存地区 若狭街道 熊川宿 2008.9.1.



水坂峠から北川に沿って若狭街道が日本海へまっすぐ下ってゆく  
峠を下り 山間部を抜け平地に出るところに熊川宿が昔の家並みのまま残っている 2008.9.1.



若狭街道が水坂峠を越えて若狭に入ると熊川宿 北川が海岸へ向かって流下る 2008.9.1.



重要伝統的建物群保存地区 熊川宿 2008.9.1.



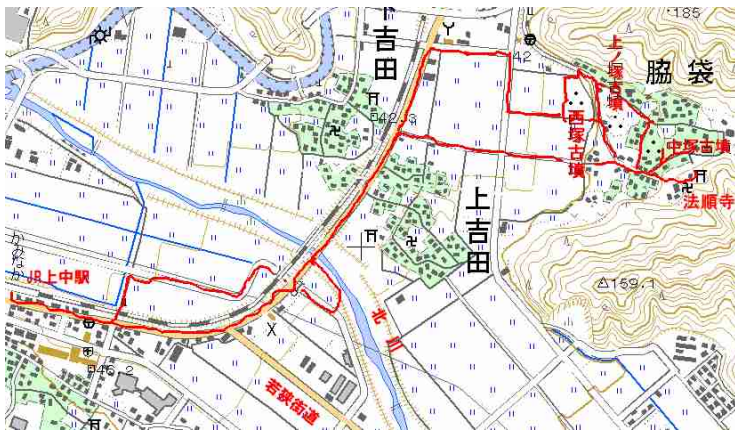
重要伝統的建物群保存地区 熊川宿 2008.9.1.

## 2.2. 5世紀 大和と結ぶこの地を治める王の墓群「脇袋古墳群」

若狭ではじめて築かれた前方後方墳・前方後円墳群



若狭で最初の前方後方墳・前方後円墳群築かれた若狭の王城の地 脇袋の郷 膳部山遠望



熊川宿をゆっくり歩いて、午後2時過ぎの小浜行のJRバスで小浜線上中駅へ。バスは日本海沿岸に向かって田園地帯が広がる中をまっすぐ走る。15分ほど北川沿いに下って、山裾を抜けて日本海側に広がる平地に出たところで、北川の中流で、右手 東から敦賀から走ってきたJR小浜線や国道を合流する。この合流点から1km弱 下ったところが上中駅でここでバスを下車したが、若狭街道・小浜線はそのままさらに北川沿いを日本海への出口小浜へ向かう。

5世紀この若狭北川流域を支配した首長たちが築いた前方後方墳・前方後円墳を築いた往生の地「脇袋」は先ほどの合流点から反対に敦賀の方へ1kmほどいった北川右岸の山裾である。



熊川宿からまっすぐ北西へ北川沿いを走る  
写真(左) 北川の対岸 右手の山々の山裾が脇袋



上中駅近く敦賀からの道との合流点  
右手から敦賀からの道を合流するとJR上中駅

JR上中駅で脇袋古墳群のある「脇袋」への道を確認して歩き出す。駅から約5km敦賀よりの北川対岸の山裾。

先ほどバスで通過した敦賀との道との合流点を敦賀の方へ進み、北川を渡って山裾の中へ回り込んだところが「脇袋」

国道沿いにお寺への石塔が立っているからすぐわかれると聞く。

車がひっきりなしに通る国道を避けて、小浜線を渡って反対側にでると「脇袋」のある山の山裾まで黄金色の田圃が延々と続いている。交通の便がないので、歩くより仕方なし。



西 小浜側に広がる田園地帯

東 三方側に広がる田園地帯 これから向かう山裾が遠くに見える

JR 上中駅の北側に出ると流れ下る北側沿いに 西の小浜側から東の三方・敦賀側へ広大な秋の実りをつけた田圃が広がる田圃の中を 30 分ほど歩いて、小浜線鉄橋・国道橋のそば 北川の土手に登ると 上流側に先ほどバスでくだった若狭街道の田園地帯が若狭・近江国境の山々を背に広がっている。

近江／若狭 国境の山々を背に とうとうと緑の中を流れ下る北川 この景色が若狭街道の出入口の昔から変わらぬ光景なのだろう。



上中町 北川の土手から若狭街道熊川宿方面の遠望 2008. 9. 1.

土手を歩いて、国道の橋に出て 橋を渡って北川の右岸にでて、右手に随分近くになった膳部山をながめながら、ゆるいカーブを描きながら橋から下ってゆく国道をお寺の石塔を見落とさないように注意して歩く。橋から 15 分ほどで、石塔のある T 字路。石塔の横に「脇袋古墳群」の案内板も立っていて、凹字にくぼんだ膳部山の中央部へ田圃の中をまっすぐな道が

続き、その懐に脇袋の集落がみえる。集落の家並みと古墳がかさなっているようで、ここからは古墳がどれか良くわからないが、集落の手前に見える森が古墳かも知れぬ。



国道から脇袋の郷へ入る入口で 田園地帯の奥 膳部山の凹字型の山裾に脇袋の集落がある 2008. 9. 1.  
 国道のT字路から、田園の中を山に向かって まっすぐの道を進むと脇袋の集落。  
 集落は膳部山の山腹で凹字型に囲まれた山裾の傾斜地にへばりついて家々が密集しており、その前面に広く田園が広がっている。また、集落の一番奥に国道に石塔があったお寺があった。古墳群はこの集落の中や集落に近い田園部に点在。いずれも民有地なのだろうか、古墳の上が畑になっていたり一部が取り崩され、形が大きく変化しているもの 集落の中の民家の庭にあるものなどである。  
 でも この集落は裕福なのだろう。一つ一つの家が大きく、古墳も形が崩されてはいるもののきれいに整備されて残されている。また、静かで落ち着いた集落 これが 5 世紀の若狭の王墓群とともに暮らしてきた証のように感じた。



5 世紀の若狭の王墓群とともに暮らす脇袋の集落 2008. 9. 1.



糠塚 上部が削り取られ、上部しか残っていない円墳 と 西塚古墳 5世紀後半の前方後円墳  
脇袋の郷より 西の日本海側を望む

近江から下ってきた北川に沿って続く 和鉄の道 『若狭街道』を守る  
若狭で築かれた最初の前方後円墳古墳群 脇坂古墳群

古代大和と関係付けられる5世紀の前方後方墳・前方後円墳が点在する脇袋の里

北川の北岸 古代大和の鉄の道をおさえる若狭首長墓 脇袋古墳群



正面に西塚古墳 その背後に、上ノ塚古墳 中塚古墳が見える  
西に開け、南には若狭街道、北側が眺められる背後を膳部山の山並みに三方を囲まれ狭い平地に  
古代若狭街道を納めたこの地の首長たちが眠る  
若狭の国造 膳臣（かしわでのおみ）一族の墓といわれる

北川の北岸 古代大和の鉄の道をおさえる若狭首長墓群 脇袋古墳群 5世紀

若狭町 上中町 脇袋 2008.9.1.



西塚古墳 5世紀後半の前方後円墳

全長74m 後円部径39m 前方部幅47m 横穴式石室を持つ前方後円墳であるが、前方部がほとんど崩り取られている

【主要出土品】須恵器・中国製神人画像鏡・仿製四獣鏡 武器（鉄剣 鉄鉾 鉄槌）  
 武具 馬具 農工具（鉄斧） 装身具（金銅製帯金具 銅鈴 銀鈴  
 金製垂飾付耳飾 玉環）

着目は 鉄器副葬ならびに朝鮮半島からの金製垂飾付耳飾







**上ノ塚古墳** 5世紀の前方後円墳 若狭地方最大の前方後円墳  
 全長 約90m 後円部径 51m 高さ 9m 前方部幅 48m 高さ 7m



上ノ塚古墳は、若狭における最初の大首長墳で、風漣・長石・埴輪を備え、3段築成である。



**中塚古墳** 5世紀の前方後円墳 全長 約60m 高さ 6m ほどといわれるが形が崩れている  
 胎袋の集落の家並の中に囲まれていて、家の間を抜けてゆく奥にある。 ここも私有地で金網に囲まれていて全体が見えない

この脇袋は近江・福井の分水嶺から流れ出た北川が山間部から平地部へ流れて出たところの北岸の山裾にあり、この地から北川を下れば、朝鮮半島・山陰・九州への航海の玄関口若狭湾 また、北川沿いを南へたどれば、近江から琵琶湖そして大和・東海である。大大陸への大和の北の玄関口。

そして、その玄関口を守ったのが、脇袋の古墳群に眠るこの地域の首長たち。若狭の国造 膳臣(かしわでのおみ)一族といわれる。

今回 この地の首長たちと鉄との直接的なつながりを調べられなかったが、当時の最大の交易品は朝鮮半島の「鉄」であり、朝鮮半島諸国ともっとも交流の盛んだった時代である。大和の最も重要な地点のひとつであったに違いない。

確かにそんな重要路を守る位置に大和と密接に関係を持った首長がいた。

朝鮮半島の「鉄」と大和の関係を浮かび上がらせる鉄の道が若狭街道だとより鮮明に感じている。

ずっとあたまにあった若狭街道と鉄の関係 やっとやっと歩けたこと そして、そこに確かな鉄の痕跡が残っていることに満足。

夕日で真っ赤になった西の空 そ 海は見えないが西に開けた若狭の王城の地を強く感じながら、上中駅へ急ぐ。

帰りは さらにバスに乗って若狭街道を走るバスの終点小浜駅へ。

そして、小浜線で敦賀へ出て敦賀から米原経由の新快速電車姫路行に乗り継いで神戸へ。

神戸に帰り着いたのは夜 10 時過ぎ。

若狭街道から近江今津経由で神戸に帰るのとは 1.5 時間近く時間がかかった。

やっぱり、近江・若狭をつなぐ道は今も地域をつなぐ重要路とつくづく感じます。

2008. 9. 1. 夜 神戸に帰り着いて



上中町からバスで約 15 分 家並みが狭く国道を西へ行くと

日本海・若狭湾が広がる 小浜市